

じやりみち

…被災地支援情報…

第104号 発行日 2015.3.31
被災地 NGO 協働センター
〒652-0801 神戸市兵庫区中道通2-1-10
TEL:078-574-0701 FAX:078-574-0702
HP:<http://ngo-kyodo.org/>
Facebook:<https://www.facebook.com/KOBE1.17NGO>
E-mail:info@ngo-kyodo.org
口座番号:01180-6-68556(郵便振替)

阪神・淡路大震災から20年、当 NGO を支えて下さった方々にお礼を申し上げます。ありがとうございました。21年目の一步を踏みだした私たちに今後ともよろしくご支援をお願いします。

2015年1月17日、阪神・淡路大震災から20年を迎えました。20年前、被災地の市民と NGO は『市民と NGO の「防災」国際フォーラム』を開催し、世界人権宣言が採択された日の12月10日に神戸宣言を発表しました。

宣言の最後に被災地の私たちは『「語り出す」「学ぶ」「つながる」「つくる」「決める」行動を重ね、新しい社会システムを創造する力を養おう』と掲げました。

さて、あれから20年を前にした2013年5月、当 NGO は高校生や大学生を中心に呼びかけ、「阪神・淡路大震災から20年 KOBE 市民と NGO フォーラム 2015」を立ち上げ、20年の振り返り作業をはじめました。主なテーマは「次世代に何を、どう伝えるか」でした。

当初、阪神・淡路大震災を直接知らない高校生や大学生中心の議論には戸惑いが見えたようです。参加者の若者のほとんどは、東日本大震災の被災地にボランティアに行っていたり、日ごろ学校のある地域で、防災教育に力を入れたりしていましたが、少し浮ついた議論になっているようにも見受けました。しかし、1年が過ぎて本番まであと半年ほどしかなくなってきたときに、「自分の身近な問題として考えよう！」という意見を機に、「なるほど！」と一気に議論が活気づきました。

思い出すに、20年前のフォーラム開催も「暮らし再建『いま』見据えて」が合言葉でした。その時は「生きてよかった」と仲間と再会を喜び合い、でも「住む家がない」という小学生の発言にドキッとさせられ、そこから公的支援を求める運動が始まりました。20年目のいま、フォーラムに集った人たちは、「阪神・淡路大震災以後の災害復興に、教訓は生きたのだろうか」「あの時、新しい社会システムを！と誓ったが社会は変わったのだろうか」と真剣に議論を重ねました。それは「助けられたいのちがあったのではないか」という問いかけがあったからなのです。

例えば、東日本大震災において、障がい者の死は一般の死より2倍を超えていたという事実。また、関連死が直接死を超えたという事実。これでは20年前の阪神・淡路大震災時から何も解決していないのではないかと、愕然としたのです。

やはり、一人ひとりの暮らしの中で身近な問題として向き合うことから、生き方(暮らし方)を問い直さなければならぬ。例えば原発に依存しない社会を求めたら、一人ひとりが真剣にエネルギー問題と向き合わなければならぬ、という一つの結論を導きました。

そして、フォーラム最終日には次世代につなぐ宣言とアクションプラン10を発表しました。

今後の課題は、この宣言やアクションプランを踏まえ、数多くの実践知を積み重ねることだと思っています。このための議論と行動が、21年目の一步として、今始まったのです。

是非、このアクションプランに共感される方々がおられましたら、是非ご一報下さい。

代表 村井雅清

(*なお、宣言及びアクションプランの詳細は、本号の2~4pに紹介しています。)



フォーラムのキーワードを張り付けた木の絵▲

20th
1995-2015



KOBE 市民と NGO フォーラム 2015 宣 言

阪神・淡路大震災から 20 年を迎えた 2015 年 1 月 24 日、現在 20 代前後の若者と当時 20 代前後だった若者、そして今は 50 代、60 代、70 代になった世代を超えた人たちが、被災地 KOBE に集まった。震災を経験していない高校生や震災を知らない人たちも参加し、東日本大震災での被災者や支援者も駆けつけた。

私たちは阪神・淡路大震災から 20 年の歩みを振り返り、震災と復興過程で得た経験や教訓が、その後の被災地に、あるいは日常の社会に活かされてきたのかを語り合った。

24 日のフォーラムとその取りまとめの討議を含め延べ 8 日間にわたる議論をとおして「次世代に何を、どのように伝えるのかという一方的なアクションではなく、異なる世代がお互いをパートナーとして協働し、未来社会へ遺（のこ）すものをつむぎ出すということではないか」と共有できた。

高校生や大学生らの若い世代からは、「“アホ”になることも大事」「型にはまらないことも大切」「自分ごととして考え、行動する」「(おまかせ主義ではなく) できることは自分たちでやろう」「ありがとう、大好き、ごめんなさいは言えるときに言うとおこう」「思いやりを大切に」など実に率直な意見が出された。これらは、双方の世代が出来てこなかったことでもあり、これからを生きる世代が大事にしようという思いも込められている。

20 年前の震災直後、私たちは戦後 50 年を振り返り「大量生産・大量消費・大量廃棄」の社会にどっぷり浸かった経済優先の暮らしを見直し、安全・安心な社会をめざそうと誓ったが、いまなお、そうした暮らしから抜け切れていないことも指摘された。

「こうして物質的な豊かさを求めてひたすら走ってきたこれまでの社会から、あらためてあらゆるいのちを大切に、生きがいを実感できるような社会をどうすれば創れるのかを、身近な暮らしの中から考え、行動しなければならないのではないか」ということにつながった。これらの議論の最後には「多世代が一つになった」と共感できる瞬間もあった。

議論を通して何度も確認した大事なキーワードには、「いのちを大切に」「自立と支えあい」「違いを認めよう」「見えないものを見よう」「声なき声に耳を傾けよう」「覚悟」などがあった。「差別をしない」「多様性を大事にしよう」「個を尊重しよう」ということも共通していた。人とつながるうえでの手ごたえを、実感する言葉だ。

忘れてならないのは、災害の度に、助けられたはずのいのちを救えなかったということ。これからは同じ失敗を繰り返してはならないということ。もうこれ以上繰り返してはならない。そのためには、まず襟を正して死者の魂と向き合おう。これからを生きる人のことも考えよう。だから、いまを真剣に生きなければならないのだとあらためて痛感した。その際、私たちは「生かされているのだ」という謙虚な気持ちを忘れてはならない。

さて、先達たちは 20 年前「暮らし再建へ『いま』見すえて」を合言葉に、被災からの再建に取り組んできた。被災者支援においては、被災者が主役であること、また被災者一

人ひとりに寄り添うこと。決して上から目線で被災者を一括りにしないことを実践知として学んできた。

その問題解決をはかるには、「自分たちでできることはやる、個人でできないことは一緒に、それでもできないことは行政に」という「補完性の原理」が大切であるということではないか。この考え方はそもそも「災害ボランティアの基本的な姿勢」にも通じるだろう。例えば、被災地において被災当事者と支援者、支援者同士の関係についても議論をした。支援に入るボランティアはともすれば終わりのない支援の重さに押しつぶされそうになるが、支援にはゴールがない。支援を受ける側（受援）と支援者、支援者同士の関係は固定したものではなく、回りめぐるものではないかという意見も出された。考えてみれば、「災害ボランティアの基本的な姿勢」は平時においても持続可能な減災社会を築くことにもつながる。

ボランティアとは、人として如何に生きるかという姿勢ではないかと言える。人として助け合うという当たり前のことが、ボランティアという言葉があるためにハードルが高いという印象を与えるなら、いっそのこと「ボランティアという言葉にさよならをしよう」という意見まで飛び出した。

他方、ボランティアという言葉も安易にさよならするのではなく、本来の活動に至るプロセス、一種の”修業”として実践を続けることが大切ではないか。いま、私たちはそのプロセスとして 21 年目の一步を踏み出そうとしているのではないだろうか。最初の一步を踏み出すには、あらためて「覚悟」が必要になる。自分と向き合い、生きるためにどうすればいいのかという、「気づき」や「目覚め」でもある。

先人から受け継いできた大切なことは、未来へも継承したい。ネイティブ・アメリカンの人たちは、生きていくうえで大切なことは、「子どもたちの、子どもたちの、子どもたちのために継承していかなければならない」と 12,000 年も前から言い続けてきた。

20 年前に KOBE の被災市民は「市民と NGO の『防災』国際フォーラム」という場をつくり、神戸宣言という貴重なメッセージを遺（のこ）してくれた。その最後に、復興の道を踏み出すには「被災地の私たちは、自ら「語り出す」「学ぶ」「つながる」「つくる」「決める」行動を重ねようと呼びかけた。その後「育む」という言葉も加えられた。

私たちは、未来社会へのメッセージとして、これまで先人が築いてきた「知恵」を生かしながら、次世代の新鮮なアイデアや感性を加え、大切なことを未来社会に伝え続けたい。その時々に必要な新しい社会を創り出すために……。

2015 年 1 月 31 日

阪神・淡路大震災から 20 年 KOBE 市民と NGO フォーラム実行委員会

阪神・淡路大震災から20年 KOBE 市民と NGO フォーラム 2015 10 のアクションプラン

阪神・淡路大震災から20年 KOBE 市民と NGO フォーラム 2015 に集まった人々との議論を元に宣言文を作り上げました。その宣言文を元に、これからの社会を担う若い世代を中心として、今後どうやって生きて行くのかを考えました。そのアクションプランを以下に示します。

一、いのちを大切にしよう

どんなときでもいのちを大切にすることが大前提。自分のいのちだけでなく、まわりのいのちも大切にしよう。

一、気軽にボランティアをしてみよう

何もできないかもしれないけど、何かできるかもしれないと思って続けたら、何でもできることに気づく。

一、できることは自分で、できないことは一緒に

個を尊重し、自分と向き合い、人とつながろう。

一、考えてつながろう、自然ともつながろう

一方的なつながりにならず、常に相手を思い、つながろう。人と人とのつながりだけでなく、自然ともつながろう。

一、声なき声を聴こう

一人ひとりに寄り添って声を聴こう。すべての人に目配り・気配り・心配りをしよう。

一、見えないモノ、見えないコトを考えよう

想像力を働かせて、目の前の人の問題を社会全体に拡げて考えよう。

一、時には“アホ”になってみよう

型にとらわれず、そこそこ自由な発想で行動しよう。そして、相手の意見を尊重し、先入観にとらわれないうちに聞こう。

一、まずは一步を踏み出して、小さな実践を重ねよう

頭でっかちに考えるのではなく、一步踏み出して体験してみよう。自分にとっての身近な実践を積み重ねよう。

一、「覚悟」を持って生きよう

一步を踏み出すための勇気を持とう。

一、「いま」を大切に生きよう

過去、現在、未来のつながりを想像しよう。

20
th

阪神・淡路大震災から20年 KOBE 市民と NGO フォーラム 2015 参加者からの感想

舞子高校環境防災科 加藤 明日香

私は、第一部のワークショップでファシリテーターをさせていただきました。班の人は大人ばかりで、自分が進行役をしていいのか、もっと適任な人がいるのではないかと不安がありました。実際始まってテーマについて話し始めると、ボランティアや防災に色々な思いを持つ



た人がいて、どうですか、と聞くと思いを語ってくださる人が多く自分が進行役だとかは忘れて、自分の考えていることであったり、その考えに対する意見であったりを聞かせてもらいました。ボランティアはなかなか自分から始められないと思います。今では、当たり前のようにボランティアに参加してもらっていますが、環境防災科に入っていなかったら、自分から参加しようとはしていないと思います。だからこそ、特別な環境にいるわけではない人がどんな気持ちを持ってボランティアに参加しているのかを聞いたことがとても印象に残っています。ワークショップで感じたのは、周りの‘声’を聴くことが大切だということ。自分もこれからボランティアに参加していくうえで心がけたいと思いました。

フォーラムでファシリテーターをさせてもらって、自分の知らなかったボランティアを行っている人の話が聞けて、自分のボランティアに対する考え方が変わるいい機会になりました。もっと人と話す‘場’が増えればいいなと思いました。

◀第1部の様子

京都大学防災研究所 特定研究員 宮本 匠

2年にわたる準備作業、当日、連夜の宣言文づくりと、気づいてみればあっという間でしたが、震災から20年をこのような形で過ごすことが出来てとてもありがたく思いました。

まとめられたメッセージはA4たった一枚におさめますが、ひとたびそれを手にすれば、参加者一人一人がそれぞれの想いや考えを語り続けることが出来る、そんな宣言文が生まれたように思います。それは、落としどころを定めて、それに照らし合わせて準備をするのではなく、準備作業そのものをプロセスとして大切にしようと進められたが故になされた、幅広いさまざまな議論の積み重ねの結果だと思っています。言わば、宣言文は氷山の一角。この短い宣言文の背景にあるものこそが今回のフォーラムの成果なのかもしれません。けれど、それは海面の下に隠れた大きな氷塊、そのままじゃ見えません。だからこそ、この宣言文を入り口に、大事にしたいと考えてきたことをこれからも考え続け、語りあいたいと思います。「空気」を読みあうことに必死になり、いつのまにか窮屈で息苦しく、自らの考えで一步踏み出せば、空気を読まないやつと白けられてしまうのではないかとおそれてしまう、そんな今日この頃ではないでしょうか。そんな中で、一連のフォーラムの集まりは、いつのまにか一種の「解放区」とでも呼べるような、すが

すがしい風が吹いていたように思います。自分が本当に大事だと思うことを正面から語りあえる、その場の居心地の良さが、例えばフォーラム当日の「多世代が一つになった」と思える瞬間につながったのだと思います。きっと、そろそろ、あの人もこの人も、フォーラムの集まりが恋しくなってきたころではないでしょうか。ごめんなさい、白状すると、僕もその一人です。そんなメンバーで集まれる機会があるといいなと思います。

▼31日の発表会後の集合写真



20
th

阪神・淡路大震災から20年 KOBE市民とNGOフォーラム2015を終えて

フォーラムの議論の中からは多くのキーワードが紡ぎだされました。当初は世代を超えた議論は難しいのかもしれないと不安になっていたこともありますが、世代間での議論がしっかりでき、最後には「ひとつの世代となって、さらに次の世代に伝えていくんだ」という感想も出てきました。このフォーラムの目的はまさに次世代に伝えるための宣言を作り出すということだったのですが、まさにその第一歩としてのフォーラムそして宣言文とアクションプランになったのではないかと思います。

阪神・淡路大震災の教訓を受け継ぐことは、若い世代にとって生半可なことではありません。しかし、KOBEを受け継ぐ存在として伝える側になっていくことは、被災地 KOBE で市民社会に関わるものとして避けられないことであると思います。それにはやはり「覚悟」がいること、つまり「目覚め」や「気づき」が必要です。そのためには、今回のフォーラムで生まれた宣言やアクションプランが生まれるまでのプロセスを肌で感じる事が大切だと感じています。

プロセスを経験する、肌で感じるということは、今

まで聞くだけで分かった気になっていた言葉の意味をもう一度考え、自分の言葉にしていく作業だと思います。自分の言葉にしていく作業をしなければ、社会を変えることは出来ません。

震災から21年目が始まりました。20年という節目を迎えた KOBE で、21年目という新たなスタートを切るきっかけを作ることのできるフォーラムにしたいと思いながら準備を進めてきました。そして、多くの参加者の想いの込められたメッセージとアクションプランを作ることができました。次はこのメッセージとアクションプランに書かれていることをどのように実行していくかを考えていかなければいけません。そのためにも、これからメッセージとアクションプランをきっかけにして、様々な場所で多くの人に参加しながら議論の場を作っていくことをし続けたいと思います。また10年、20年経ったときに、アクションを起こして「良い方向に社会は変わってきているよね!」と言えるように。(頼政良太)



■編集後記

皆さん、こんにちは。編集を担当している頼政です。2015年3月25日で能登半島地震から丸8年となりました。私にとって初めての災害ボランティア活動を行ったのが能登半島地震でした。8年たってもやはり忘れられつつある被災地なのではないでしょうか？

私たちは足湯隊として能登半島の被災地に関わり続けています。今更何ができるわけでもないのですが、1年に1度は能登を訪れ能登の空気に癒され、人柄の良さに感動しています。よく支援に終わりが無い、撤退の時期を見極めるのが難しい、などという議論が行われますが、能登半島に関わっている私たちも支援の終わりをどう考えればいいのか、悩みでもあります。

その答えは簡単には見つかりませんが、活動の意味を模索しつつ、これからも能登に関わり続けたいと思います。

当センターの姉妹団体「CODE 海外災害援助市民センター」の活動にもご協力よろしくお願ひします。

CODE では、現在アフガニスタンぶどうプロジェクト、中国四川省地震支援活動、ハイチ地震支援活動、フィリピン台風支援活動などを行っています。

さらに今年2月に発生したアフガニスタン雪崩災害の支援活動も開始しています。皆様ご協力よろしくお願ひします。

詳しくはHP等をご覧ください。

HP:<http://code-jp.org/>



■事務局ボランティアも募集しています！

私たちと一緒に活動してくださるボランティアさんを随時募集しています！

初心者の方も全く問題ありません。ボランティアでの活動を通して、NGOや市民社会、防災・減災のことも学ぶことができます。やる気のある方大歓迎です。ぜひお越しください。

第55号 2015.3.31



発行所：被災地 NGO 協働センター 〒652-0801 神戸市兵庫区中道通2-1-10
 TEL:078-574-0701 FAX:078-574-0702 HP:http://ngo-kyodo.org/



阪神・淡路大震災から20年、東日本大震災から4年が経ち、被災者の方にとっては、まだまだ先の見えない不安に覆われていました。「3.11」「1.17」だけはあの時を思い出して、泣いたり、立ち止まったり、振り返ることのできる唯一の日だと思います。復興までは長い道のりですが、一步一步確実に歩んでいきたい、みなさんと一緒に。。

東日本大震災から4年

東日本大震災から3月11日で4年の月日が経ちました。いまだ、約23万人の人たちが不自由な避難生活を強いられています。犠牲者は1万8475名、行方不明者は2,584名、震災関連死は3,244名になりました。亡くなられた方々には心からご冥福をお祈り申し上げるとともに、行方不明の方が一日も早く見つかりますようにお祈り申し上げます。

被災地では、インフラ事業が進み、山は無残にも削られ、山肌が剥き出しとなり、山津波を恐れる住民が少なくありません。また、海には防潮堤の建設が進み、まるで要塞に囲まれたような町並みが点在しています。



大槌町の巨大な防潮堤

復興が進んでいないと感じる人は73%にも及び、仮設住宅に関しては、撤去率が10%止まりとなり、阪神・淡路大震災では5年を前に解消されていて、一概に比較できませんが、東北3県では仮設の解消が遅れていることは否めません。仮設も4年も経つと老朽化が進んできます。ある作り手さんの仮設では雨漏りが酷く、もうこれまでに5回も修繕に入ったようですが、一度雨漏りになると角部屋のお部屋は絨毯まで水浸しになるようです。引っ越しをとも思うのですが、高齢の人にとっては住所変更などに伴う事務作業はとても大変で引っ越し気になれないのだそうです。

また岩手県では廃業した事業所も多く、再開の意思はあっても人口の減少、高齢化などを理由に継続が困難な場合も多いそうです。かさ上げなどの工事も進んでいるように見えますが、今から3年も先にならないと終わらず、その後から家の建築が着工するのです。それも計画通りに進めばの話です。

岩手県大船渡市の被災者に至っては、高台移転を待

っていたところ、2月に市役所から連絡があり、区画割りかと思って意気揚々と出掛けたら、山から水が出て工事しても水が止まらないというのです。高台移転が急きょ中止となり、行くところがなくなったと肩を落としておりました。「4年も待ったのに…」という言葉が悲しく心に響きました。(神戸新聞に寄稿した記事より一部抜粋 2015年3月22日)

ある復興住宅では、去年できたばかりなのにも関わらず、すでに10人も亡くなったという話を聞きました。「ここは(復興住宅)は老人ホームだからね。仮設の時は長屋形式で声も掛けやすくよかったけど、ここはコンクリートでぎっちりだし、みんな仮設から出て、気が緩むんだらうね」と。他の復興住宅でも鬱になった人もいて「この5階から飛び降りたい」という人もいます。

一方で、仮設に残っている人は「仮設を出ていく人はルンルンだけど、残された方はね…。集約という話もあるけど、また知らない人と一緒になるのは、不安です」という人もいます。



仮設住宅の様子

そんな中で、「3.11」は春の吹雪とともに迎えました。まるであの4年前を思い出すような雪の日となりました。遠野仮設住宅では、竹灯籠に灯りが灯されました。被災者からは「仮設の供与期限が来年どうなるのかわからないので、ぜひ延長してほしい」と切実な訴えがありました。

また釜石の復興住宅では住民の有志がチューリップと竹灯籠とまけないぞうを全戸にプレゼントしました。「家は、母子家庭であの津波で親戚10人以上が亡くなりどうしていいかわからなかったけど、なんとここまで来れた。息子は病気で毎日注射をしないとイケないから、息子の前では泣けないから…」と玄関の前で住民さんと立ち話をしながら、涙が溢れていました。

やはり、大切な「3.11」という日。普段は必死に生活を続け、この日だけはあの日あの時を思い出し語り合える大切な日。



◀竹灯籠とまけないぞう

▼3.11 追悼の灯



4年を迎えた被災地では、ボランティアもこの3月で補助金が終わり、支援体制も薄くなっていく状況で仮設から復興住宅などへの移転が進んだり、インフラ整備がめまぐるしく変わる中で、被災者の人たちが支援の隙間からこぼれ落ちていく、つらい状況でもありました。

ぞうさんの作り手さんは、ぞうを作ることで元気ももらっています。大船渡の仮設では、自力再建して仮設を出ていった後でも、ぞうさんの日には、集会所に集まって、みんなでわいわいがやがや「あ〜今日もよく笑った」と言って、針を運んでいます。その作り手さんが寄せてくれたメッセージを紹介します。

「4年目を前に隣町に引っ越しました。それでも仮設の集会所に集まって、ぞうさんを作るのが楽しみです。自分たちが助けられたように、誰かの心を癒してくれて可愛いぞうさんをもう少し続けたいです。」

私たちはこれからも「まけないぞう」を通して、支援活動を続けて行きます。ただ、5年目に入り、まけないぞうの販売も低迷しています。ぜひ、まけないぞうを購入するという形で東日本の支援をして下さい。どうぞよろしくお願いします。 担当 増島 智子

■入会・カンパのお願い

被災地 NGO 協働センターでは、会員を随時募集しています。普段なかなか活動にご参加できない方でも賛助会員等で活動に間接的にご参加いただくことが出来ます。ぜひよろしく申し上げます！

活動カンパ、事務局カンパも随時受け付けています。下記の振込先によりしくお願い致します。

- ★団体会員 年会費 ¥ 10,000 × 1口以上
- ★個人会員 年会費 ¥ 3,000 × 1口以上
- ☆団体賛助会員 年会費 ¥ 10,000 × 1口以上
- ☆個人賛助会員 年会費 ¥ 3,000 × 1口以上
- ☆自由選択会員 年会費 ¥ 任意の額

郵便振替 加入者名：被災地 NGO 協働センター
口座番号：01180-6-68556

～支援者からのメッセージ～

作り手さんたちの笑顔をお祈りしながら、ほんの気持ちですが、タオルを送ります。我が家では、阪神大震災の時のまけないぞうくんも、東北からやってきたまけないぞうくんも元気です。熊本より

はるばる日本から「まけないぞう」タオルが来てくれました。このタオル、東日本大震災の被災者の方が一つ一つ縫ってくださっています。チャレンジの多い毎日に凹むことが多いですが、このゾウさんの優しい顔を見ると、大丈夫だとホンワカした気持ちになります。本当は私が支援したいのに、逆に助けていただいています。ぞうの歩みのように一步一步。

～作り手さんからのメッセージ～

月日の流れは早いこと、あの日、あの時より4年目となり、でも私の心の中には、いつも海、波に流れたことは、昨日の様に思い出す、恐ろしい事です。ただ、ぞうさんを作っている時だけは忘れます。ぞうさんの顔作りがいちばん大変、同じ形に出来ないこと。夢中になって作ります。私のぞうさんどこへ行くのかと元気でいてね。会えることを楽しみにして…。(陸前高田市仮設 75才女性)

▼ぞうの作り手さんと



ぞうさんは、20年作っていても飽きないよ。だって元気もらえるんだもん。これがなかったら淋しいよ。脳梗塞で倒れたときもリハビリでやらせてもらえたからここまで出来ました。ぞうさんに感謝です。(神戸市 77歳女性)

1月に上映会を行った「友よ！大重潤一郎 魂の旅」ですが、ギャラリー島田の火曜サロンで上映されることになりました。以下の通りご案内しますので、是非お運び下さい。

上映日時：2015年4月14日(火)

上映時間：午後6時00分開場／午後6時30分上映(109分)

上映場所：ギャラリー島田 B1F

◎上映後トーク：島田誠・坪谷令子・村井雅清

会費：1000円

主催：アート・サポート・センター神戸

共催：しみん基金こうべ／被災地 NGO 協働センター

<予約・問い合わせ>

アート・サポート・センター神戸(ギャラリー島田内)

TEL：078-262-8058 e-mail：info@gallery-shimada.com

〒650-0003 神戸市中央区山本通2-4-24 リランズゲート B1F